

# 琉球大学学術リポジトリ

高校英語における学習指導要領の目標は達成されているか：生徒の視点からの検証

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教職センター 公開日: 2020-04-06 キーワード (Ja): 学習指導要領, 高校英語, コミュニケーション能力 キーワード (En): 作成者: 深澤, 真, Fukazawa, Makoto メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/44989">http://hdl.handle.net/20.500.12000/44989</a>

# 高校英語における学習指導要領の目標は達成されているか

－生徒の視点からの検証－

深澤 真\*

Validation Study from Students' Perspectives:  
Has the Objectives of the Course of Study been Achieved?

Makoto FUKAZAWA

キーワード： 学習指導要領, 高校英語, コミュニケーション能力

## 1. 研究の背景と目的

現在日本の英語教育はかつてないスピードで改革が進められている。2020年から外国語活動が小学校中学年へ前倒しされ、教科としての小学校英語が高学年に導入され、さらに中学校においては英語の授業は原則英語で行うこととなる。高校も例外ではなく、高等学校学習指導要領(文部科学省, 2018)では、さらに高いレベルでの英語コミュニケーション能力の育成が求められている。

過去20年の高校英語教育の変遷を振り返ると、高等学校学習指導要領(文部科学省, 1998)において実践的コミュニケーション能力の育成が明記され、Oral Communication A, B, Cが導入された。同時期にJETプログラムも開始され、多くの高等学校にALT(外国語指導助手)が配置され、コミュニケーション能力育成の一端を担い、現在も継続されている。2003年には「日本人の英語力育成のためのアクションプラン」が始まり、コミュニケーション能力育成の拠点校として、Super English Language High School (SELHi)プログラムも開始された。さらに、高等学校学習指導要領(文部科学省, 2009)では、英語Iと英語IIはそれぞれコミュニケーション英語IとIIへ、オーラル・コミュニケーションA, B, Cは、ライティングも含む産出技能を中心とした英語表現IとIIに改められた。この学習指導要領では、英語の授業をコミュニケーションの場とすることや、4技能を総合的に学ぶだけでなく4技能を統合したコミュニケーション能力の育成すること、英語の授業は原則英語で行うことなどが示された。

しかし、高等学校におけるこれまでの英語コミュニケーション能力育成のための教育改革が順調に進んできたわけではない。大学受験を強く意識し、文法訳読式の授業からなかなか脱却できない現状があるからである。高等学校の英語教員は大学入試のために文法に焦点を当てた授業をする傾向にあること(Gorsuch, 2001)が指摘されるとともに、親や生徒も受験で良い成績を取ることを最重要視している(White, 1987)。また、大学入試のリーディング問題は非常に難解なもので、その傾向は変わっておらず(Brown & Yamashita, 1995; Kikuchi, 2006)、難解な文法や英文を読み解くために授業は訳読中心となりがちである。さらに、Baily 他(1996)では、不十分な教員研修により、新たに採用された教員は自分が教わったように教えてしまうことを指摘して

\*琉球大学教育学部英語教育専修

いる。

これらは教員からの視点による学習指導要領の効果を検証した研究である。しかし、生徒の視点からの検証は少なく、唯一 Kikuchi & Browne (2009) が生徒の視点より、高等学校学習指導要領（文部科学省，1998）の外国語について教員の指導方法と学習指導要領の目標の達成度について検証している。この研究で、全体的な傾向として生徒は学習指導要領の目標が教員によって効果的に実施されているとは感じていないことがわかった。また、受験英語の教員への過度なプレッシャーから、長い説明と文法的構造の暗記に焦点がおかれていることやリーディング、ライティングの主な教授方法が訳読であることも指摘されている。さらに、それぞれの科目で見ると、英語Ⅰではスピーキングやライティングの積極的な態度を育成するのに役立ったとは感じていない（59%）ことや、英語が現実の状況でどのように使われるかを強調するやり方で教わっていないと感じている（63%）ことがわかった。英語Ⅱについてもほぼ同様の結果となった。オーラル・コミュニケーションⅠについても「分析や説明に多くの時間を使いすぎない」という項目を除いて、全ての質問項目について学習指導要領を効果的に実施されていることについて否定的であった。オーラル・コミュニケーションⅡについては、全ての質問項目について学習指導要領を効果的に実施されていることについて否定的な回答であった。このように Kikuchi & Browne は、学習指導要領（文部科学省，1998）の目標と実際の授業との明らかなギャップがあることを示した。この研究を基にして、本研究では現在の学習指導要領（文部科学省，2009）について以下の研究課題の検討を行うことを目的とする。

- (1) 学習指導要領に書かれているコミュニケーションを目的とした英語指導に関する目標を、実際の授業ではどのくらい達成しているのか。
- (2) 高校の英語の授業で教員の指導方法を生徒はどのように見ているか。

## 2. 調査方法

### 2.1 協力者

本調査は2018年12月に実施され、日本人大学生63名が参加した。そのうち最後までアンケートを回答していなかった学生（9人）、履修していないと答えている科目について回答を行うなど妥当性や信頼性が疑われる学生（2人）、さらにデータの研究目的の使用に不同意の学生（2人）を除いた50人分の回答を有効データとした。有効データの内訳は、男子学生23人、女子学生が27人であった。また、1年生38人、2年生3人、3年生6人、4年生3人であった。

### 2.2 アンケート

学習指導要領（文部科学省2009）に基づき70項目からなるアンケートを Kikuchi & Browne (2003) を参考に作成した（付録参照）。アンケートは6パートで構成された：[Part 1] 協力者の背景情報について（8項目）；[Part 2] 英語教育全体の目標について（3項目）；[Part 3] コミュニケーション英語Ⅰについて（15項目）；[Part 4] コミュニケーション英語Ⅱについて（15項目）；[Part 5] 英語表現Ⅰについて（13項目）；[Part 6] 英語表現Ⅱについて（15項目）。最後にアンケート調査への協力確認の質問が1つあり全体として70項目となっている。

次に項目内容の概要をまとめる。Part 1では、学年、年齢、高等学校で取った英語の科目などの背景情報調査を行い、本調査で必要な情報を有しているかどうかの確認を行う。Part 2では、学習指導要領（文部科学省2009）の外国語科の目標に関連した英語の授業全体への質問を行う。

Part 3 では、コミュニケーション英語 I の目標、内容、言語活動に関連する質問を行い、生徒から見た教員の指導と学習指導要領の目標の達成度を問う。さらに、このパートの最後に Kikuchi & Browne と共通する発音と文法に関する質問を 2 項目、2009 年の学習指導要領で強調されていた文法の指導とコミュニケーション活動の関連付けについて 1 項目質問した。この最後の 3 問はこの後のパートすべてに共通する質問となっている。Part 4 は、コミュニケーション英語 I についての質問を踏襲したコミュニケーション II の質問となっている。Part 5 では、英語表現 I の目標、内容、言語活動に関する質問の他、上述した科目共通の質問が問われており、これは英語表現 II について問う Part 6 も同様である。

質問は主に客観式で、1 (そう思わない) ~ 6 (そう思う) で回答する 6 件法を採用した。また、各パートの最後に各科目の授業の印象や思い出したことを自由記述する質問もつけた。

### 2.3 手順と分析

2018 年 12 月に研究者が担当した 4 つのクラスでオンラインアンケートを実施した。回答時間はおよそ 15 分程度である。分析は、調査の性格上、主に記述統計を用いる。Kikuchi & Browne (2009) を基に、6 件法の回答を 1, 2 の [そう思わない]、3, 4 の [どちらとも言えない]、5, 6 の [そう思う] の 3 つのカテゴリーに分類し、主に [そう思う] と [そう思わない] の割合に焦点を当てて回答を分析する。また、それぞれの英語の科目に関する自由記述回答については、質的な面より検討を行う。

## 3. 結果

### 3.1 学習指導要領外国語の全体目標について

学習指導要領 (2009) の全体的な目標についての回答をまとめたものが表 1 である。学習指導要領における外国語の目標はコミュニケーション能力を養うことであり、外国語を通じて、(1) 言語や文化に対する理解を深めること、(2) 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること、(3) 情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を養うことの 3 つを柱としている。問 9、10、11 では、それらの目標について高校の授業が役に立ったかどうかを尋ねている。結果は総じてどちらとも言えない 3、4 の回答が一番多かった (それぞれ 46.0%、52.0%、56.0%)。[そう思わない] 1, 2 の回答と、[そう思う] 5, 6 の回答を比較してみると、問 9 で、言語や文化に対する理解に役立ったと思う学生 (38.0%) は、そう思わない学生 (16.0%) の 2 倍以上となっていた。問 10 の積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するのに役立ったかどうかに関する質問では、[そう思わない] に比べ、[そう思う] が 8% 多かった。問 11 の情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を高めるのに役立ったかという質問に対しても [そう思う] とする回答 (32.0%) が [そう思わない] (12.0%) を大きく上回る結果となった。

表1 学習指導要領外国語の全体目標に関する生徒の意識

英語の授業の全体目標 私の受けた高校の英語の授業は…	(そう思わない)		←→		(そう思う)	
	1	2	3	4	5	6
9 言語や文化に対する理解を深めるのに役立つ。 た。	2	6	12	11	11	8
	16.0%		46.0%		38.0%	
10 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するのに役立った。	5	5	13	13	8	6
	20.0%		52.0%		28.0%	
11 情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を高めるのに役立った。	4	2	11	17	8	8
	12.0%		56.0%		32.0%	

注. N=50

### 3.2 コミュニケーション英語 I

コミュニケーション英語 I の授業についての生徒の回答をまとめたものが表 2 である。問 12～14 までの 3 項目がこの科目の目標に関する質問、問 15～17 が授業に取り入れなければならない内容について、問 18～22 が授業で行われた具体的な言語活動について、問 23～25 が音声や文法に関する科目間に共通の質問である。コミュニケーション英語 I の目標に関する質問では、半分以上の生徒が[どちらとも言えない]の 3, 4 に回答した。[そう思う]と[そう思わない]を比較すると、いずれの質問でも[そう思う]と感じている生徒の方が多ことがわかった（それぞれ 34.0%, 40.0%, 36.0%）。

授業に取り入れなければならない内容については、問 15 理解したり伝えたりすることを実践する活動を取り入れていたと、問 17 英語を使って授業を行っていたの 2 つの質問で[そう思う]の割合が、最も多くなった（それぞれ 46.0%, 46.0%）。問 16 の言語使用場面の設定についても肯定的な回答が否定的な回答を上回った（26.0%）。

具体的な言語活動についての質問では、問 18 聞いて理解する活動、問 19 読んで理解する活動、問 20 音読活動において他のカテゴリーに比べて[そう思う]の割合が最も高かった（それぞれ 44.0%, 46.0%, 42.0%）。聞くこと、読むことなど受動技能の活動を積極的に行なっている事がわかる。その他の質問項目については、中央値付近の 3 と 4 に回答が集まる傾向が見られるが、肯定的な回答と否定的な回答を比較すると総じて肯定的な回答の割合が高いことがわかった。

科目間に共通の質問では、問 24 の文法の指導に関する質問で[そう思わない]の回答の割合が[そう思う]よりも 2 倍以上高くなった。つまり、文法など、英語についての分析や説明は必要最小限度に必ずしもとどめられていない事が明らかになった。

質的な検討を行うために、問 26 ではコミュニケーション英語 I の授業で印象に残っていることについて自由記述形式で尋ねた。回答数は 36 であった。回答にあった生徒の意見・コメントを (1) 大学入試、文法訳読、教科書に関する意見、(2) コミュニケーション活動に関する意見、(3) 発音、音読に関する意見、(4) その他の 4 つに分類した。これら 4 つのカテゴリーに分類した理由は、生徒からのコメントが多かったことである。大学入試、文法訳読、教科書に関しては、Kikuchi & Browne (2009) でコミュニケーション中心の授業を阻害する要因として挙げられている。コミュニケーション活動に関する意見は、学習指導要領 (2009) の目標に直接関係する内容であること、発音や音声についての意見も学習指導要領の各科目の指導上の配慮事項となっていることなどを踏まえ、それぞれカテゴリー化した。カテゴリーが重複する回答も含まれており、その場合は重複するそれぞれのカテゴリーに入れて計算している。

コミュニケーション英語 I では、コミュニケーション活動に関して 12 のコメントがあり、後述するその他の意見 (12) 同様最も多かった。例えば、「初めは英語での会話に苦労した。」、「み

んなの前で自分の調べたことを英語で発表した。私はリア充について英語で話しました。],「グループ学習を行なって、それぞれのグループに発表する問題番号が振り分けられて代表者がそれを発表する感じの授業でした。」などである。また、全て授業が英語で行われたというコメントも1つあったが、授業内のコミュニケーションがすべて英語で行われていると判断し、このカテゴリーに加えた。

次いで多かったのが、発音・音読のカテゴリーである(9)。このうち音読についてのコメントが多く(7),「その単元について音読, 要約することで理解が深まった。」「先生が音読するのではなく, CDの音声を1文ずつ止めて聞かせ, それに続く形で復唱していた。」などのコメントがあった。2つ目のコメント例のようにシャドーイングも音読のカテゴリーに含めた。発音についても「声に出して発音することに重点を置いていた。」など2つのコメントがあった。

表2 コミュニケーション英語Iに関する生徒の意識

コミュニケーション英語I この授業で先生は…	(そう思わない)		←→		(そう思う)	
	1	2	3	4	5	6
12 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成していた。	1	6	10	16	10	7
		14.0%		52.0%		34.0%
13 情報や考えなどを的確に理解する基礎的な能力を育成していた。	1	4	10	15	12	8
		10.0%		50.0%		40.0%
14 情報や考えなどを適切に伝えたりする基礎的な能力を育成していた。	3	2	10	17	11	7
		10.0%		54.0%		36.0%
15 情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践する活動を取り入れていた。	2	4	8	13	15	8
		12.0%		42.0%		46.0%
16 情報や考えなどを実際に理解したり伝えたりする具体的な言語の使用場面を設定していた。	2	6	14	15	9	4
		16.0%		58.0%		26.0%
17 英語を使って授業を行っていた。	2	6	7	12	8	15
		16.0%		38.0%		46.0%
18 物事の紹介や対話などを聞いて、情報や考え、概要や要点を理解する活動を授業で行なった。	1	6	8	13	13	9
		14.0%		42.0%		44.0%
19 説明や物語などを読んで、情報や考え、概要や要点を理解する活動を授業で行った。	3	1	6	17	13	10
		8.0%		46.0%		46.0%
20 聞き手に伝わるように音読する活動を授業で行った。	3	5	8	13	14	7
		16.0%		42.0%		42.0%
21 聞いたり読んだりしたことなどに基づき、話し合いや意見の交換をする活動を授業で行った。	2	6	5	18	13	6
		16.0%		46.0%		38.0%
22 聞いたり読んだりしたことなどに基づき、簡潔に書く活動を授業で行った。	1	7	6	17	12	7
		16.0%		46.0%		38.0%
23 イントネーション、話す速度、声の大きさなどに注意して聞いたり話したりする指導をした。	2	6	12	12	12	6
		16.0%		48.0%		36.0%
24 文法など、英語についての分析や説明は必要最小限度にとどめていた。	3	13	16	11	5	2
		32.0%		54.0%		14.0%
25 コミュニケーション活動と関連づけて文法の指導をしていた。	4	5	13	16	8	4
		18.0%		58.0%		24.0%

注. N=50

大学入試、文法訳読、教科書についてのコメントは7つあった。その内、教科書に関するコメントは4つで、「基本的に予習の答え合わせが多かった。」「教科書を黙々と進めるだけの作業的な授業。コミュニケーションのカケラもない。」などコミュニケーション活動の行われる授業とは対照的な授業であることが垣間見えるコメントもあった。残りの3つは文法訳読に関するコメントで、「文法の解説が多かった。」とのコメントのほか、訳読で英語の力を伸ばすことができたという意見もあった。

その他のコメント(12)として、「英語の歌を歌った。」「ALTの先生との授業は楽しく学べた。」「ALTに英作文を添削してもらおう。」などのコメントがあった。

### 3.3 コミュニケーション英語Ⅱ

表3は、コミュニケーション英語Ⅱに関する生徒の回答をまとめたものである。問27～29はコミュニケーション英語Ⅱの目的に関する質問で、半数以上の生徒が3,4の[どちらとも言えない]と回答していた。また、[そう思う]と回答した生徒の割合は、[そう思わない]と回答した生徒より多かった。この傾向はコミュニケーション英語Ⅰ同様である。特に、問28の理解する能力の育成、および問29の伝える能力の育成については肯定的な意識が否定的な意識に比べて非常に高かった(それぞれ36.0%, 40.0%)。

授業に取り入れるべき内容についての質問では、問30で情報や考えなどを理解したり伝えたりする実践活動を取り入れていたかについて42.0%の生徒が肯定的に捉えており、否定的な意識を持つ割合の3倍に上った。また、問32の英語を使って授業を行っていたことに対して[そう思う]と答えた生徒は48.0%とほぼ半数に登り、非常に高い割合であった。

問33～37の言語活動に関する質問についても、おしなべて[どちらとも言えない]のカテゴリーの回答割合が最も多いものの、割合が2番目に多かったのは[そう思う]の肯定的回答であった。否定的回答と肯定的回答の比較では、問35の音読や暗唱について肯定的な回答が特に多く、これらの言語活動が多く行われていることがわかった。

問38～39の各科目共通質問項目では、文法的説明が必要最小限かどうかについて否定的意見(22.0%)、肯定的意見(22.0%)と意見が分かれる結果となった。

コミュニケーション英語Ⅱについての自由記述回答は24あった。そのうちコミュニケーションについての記述が9、大学入試、文法訳読、教科書についての記述が6、発音、音読についての記述が7、その他の記述が4であった。コミュニケーションに関する記述が最も多く、記述例として、「週末の出来事などをペアで話し合う時間があった。」「グループで協力する事が多かったように感じます。そして発表点を設けていたのでみんなが積極的に前に出て発表していました。」「英語をただの机上の知識に留めることがないように料理番組の出演者になろう!という企画などがあった。紙で料理のイラストを作って英語で作り方を紹介し合うという発表があったり、修学旅行で海外にホームステイに行く機会があったのでそれに対して実践的に英語が使えるよう、授業中歩き回って英語で会話をする場面が多々あった。自分としてはあまり勉強という圧迫感のある授業ではなく、非常にたのしくワクワクするものだった。」などがあり、積極的かつ楽しみながら授業に参加している様子がうかがえるものもあった。また、「全て英語で授業が行われていた。」「ALTが授業をしたり only English の時間だった。」など英語での授業に関するコメントもあった。

大学入試、文法訳読、教科書に関する記述の内訳は、文法訳読が3、教科書に関するものが3であった。文法訳読についてのコメントとして「ひたすらに長文を日本語訳していく授業でした。順番に当たっていくので、答えられないといけないという恐怖から、英語そのものは理解していないのに、辞書などを使って機械的に授業を受けていた。」「特に印象に残っていない。だからだ

らと教科書を訳し、ただそれだけで終わっていた。何も身につけていないと思ったので塾での勉強を頑張っていた。」と授業についてやや否定的なコメントが多かった。教科書に関するコメントも「普通に教科書を使用した授業を行っていた記憶があります。」「教科書を黙々と進めるだけの作業的な授業。コミュニケーションのカケラもない。」と授業に対して否定的なコメントも含まれていた。

発音、音読に関するコメント数は、それぞれ2と5でどちらにも当てはまるコメントもあった。発音についてのコメントは「音節に合わせてリズムよく単語を発音し、復唱させていた。」(発音・音読両方に該当)、「英語の発音に関する先生の説明が多くて、苦手な子にローマ字読みじゃなく、聞き取った音をカタカナ英語にするとか、繋げて読むポイントを教えていた。」である。

表3 コミュニケーション英語Ⅱに関する生徒の意識

コミュニケーション英語Ⅱ この授業で先生は…	(そう思わない)		←→		(そう思う)	
	1	2	3	4	5	6
27 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成していた。	1	6	7	23	7	6
	14.0%		60.0%		26.0%	
28 情報や考えなどを的確に理解する能力を育成していた。	1	4	10	17	9	9
	10.0%		54.0%		36.0%	
29 情報や考えなどを適切に伝えたりする能力を育成していた。	1	3	14	12	11	9
	8.0%		52.0%		40.0%	
30 情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践する活動を取り入れていた。	1	6	9	13	14	7
	14.0%		44.0%		42.0%	
31 情報や考えなどを実際に理解したり伝えたりする具体的な言語の使用場面を設定していた。	1	10	11	12	11	5
	22.0%		46.0%		32.0%	
32 英語を使って授業を行っていた。	3	7	6	10	12	12
	20.0%		32.0%		48.0%	
33 対話や討論などを聞いて、情報や考え、概要や要点を理解する活動を授業で行なった。	2	7	7	17	7	10
	18.0%		48.0%		34.0%	
34 速読したり精読したりするなど目的に応じた読み方をする活動を授業で行った。	3	4	9	17	10	7
	14.0%		52.0%		34.0%	
35 聞き手に伝わるように音読や暗唱する活動を授業で行った。	2	5	10	13	12	8
	14.0%		46.0%		40.0%	
36 聞いたり読んだりしたことなどに基づき、話し合って結論をまとめる活動を授業で行った。	2	7	14	12	9	6
	18.0%		52.0%		30.0%	
37 聞いたり読んだりしたことなどに基づき、まとまりのある文章を書く活動を授業で行った。	2	8	10	15	9	6
	20.0%		50.0%		30.0%	
38 イントネーション、話す速度、声の大きさなどに注意して聞いたり話したりする指導をした。	2	5	11	17	7	8
	14.0%		56.0%		30.0%	
39 文法など、英語についての分析や説明は必要最小限度にとどめていた。	3	8	18	10	6	5
	22.0%		56.0%		22.0%	
40 コミュニケーション活動と関連づけて文法の指導をしていた。	2	6	10	15	12	5
	16.0%		50.0%		34.0%	

注. N=50



また、音読に関するコメントはコミュニケーション英語Ⅱでも多く、「音読が多かった。」「音読、ディクテーションなどをやる機会が多かった。」「シャドウイングをやりました。」などがあった。

### 3.4 英語表現Ⅰ

生徒の英語表現Ⅰについての意識をまとめたものが表4である。問42, 43が英語表現Ⅰの目標に関する質問であり、問42の積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成していたと肯定的に考えている学生が全体の約5割で最も多かった。問43の伝える能力の育成に関しても肯定的に考えている生徒の割合が40.0%と高い一方、否定的に考えている生徒の割合は6.0%と非常に少なかった。

授業で行うべき内容についての問44～46では、問46の英語で授業を行っていたと考えている生徒が40.8%と最も多く、英語表現Ⅰでも英語での授業が浸透してきている事がうかがわれる。授業での言語活動についての質問の問47～50は、全ての質問項目において3, 4の[どちらとも言えない]の回答が多数を占めた一方、肯定的に捉えている生徒と否定的な生徒の割合の比較では、肯定的な生徒の割合が一貫してやや多かった。

問51～53の科目共通質問項目では、問52の文法的説明を必要最小限にとどめていたかどうかの質問で否定的な回答が肯定的回答の割合を上回った（それぞれ28.0%, 26.0%）。英語表現Ⅰにおいても文法に重点が置かれている事が明らかとなった。

表4 英語表現Ⅰに関する生徒の意識

英語表現Ⅰ この授業で先生は…	(そう思わない)		←————→		(そう思う)	
	1	2	3	4	5	6
42 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成していた。	3	2	9	12	15	9
	10.0%		42.0%		48.0%	
43 論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を育成していた。	1	2	11	16	13	7
	6.0%		54.0%		40.0%	
44 情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践する活動を取り入れていた。	1	3	14	14	9	9
	8.0%		56.0%		36.0%	
45 情報や考えなどを実際に理解したり伝えたりする具体的な言語の使用場面を設定していた。	1	6	12	13	12	6
	14.0%		50.0%		36.0%	
46 英語を使って授業を行っていた。	4	6	9	10	5	15
	20.4%		38.8%		40.8%	
47 与えられた話題について、即興で話す活動を授業で行っていた。	5	9	5	16	9	6
	28.0%		42.0%		30.0%	
48 聞き手や目的に応じて簡潔に話す活動を授業で行っていた。	2	9	10	16	9	4
	22.0%		52.0%		26.0%	
49 読み手や目的に応じて、簡潔に書く活動を授業で行っていた。	2	6	13	11	12	6
	16.0%		48.0%		36.0%	
50 聞いたり読んだりしたことに基づき、情報などをまとめ、発表する活動を授業で行っていた。	2	9	8	12	10	9
	22.0%		40.0%		38.0%	
51 イントネーション、話す速度、声の大きさなどに注意して聞いたり話したりする指導をした。	2	10	10	13	12	3
	24.0%		46.0%		30.0%	
52 文法など、英語についての分析や説明は必要最小限度にとどめていた。	8	6	15	8	8	5
	28.0%		46.0%		26.0%	
53 コミュニケーション活動と関連づけて文法の指導をしていた。	4	7	10	10	13	6
	22.0%		40.0%		38.0%	

注. N=50

英語表現Ⅰについての自由記述回答の回答数は30であった。そのうち、コミュニケーションに関する記述は12、大学入試、文法訳読、教科書に関する記述が6、発音、音読に関する記述が3、その他が10であった。コミュニケーションに関するコメントとして、「一年の時に英語で調べたことをポスターにまとめ発表することが楽しかったが、とても忙しかった。」「ALTに先生に、休み時間に会いに行き、英語で話し、ポイントを集める企画があった。それをしないと成績に入るから、やらなければいけなかったし、難しかったが、いい機会だったと思う。」「パソコンやヘッドホンを使って、先生が無作為に組んだペアで会話をしたのが面白かった。」などがあり、様々な形でコミュニケーションを取る機会を作っている事がうかがえる。

一方で文法訳読に関する記述(4)、教科書に関する記述(2)も散見された。文法の自由記述例を見てみると「文法を何回も読んで覚えた。」「文法事項の説明に終始していた。」など、一部では英語表現の授業で文法に重点を置いていると思われる記述があった。

発音、音読についてのコメントは3つにとどまり、「ALTの先生と一緒に授業したので、ネイティブの発音が聞けた。」「単語の発音を繰り返す。ペアで音読させる。みんなの前で毎回全員が発表する。」などのコメントがあった。

英語表現ではその他のコメントが10とやや多く、その中に多かったのがつまらない授業だったというコメント(4)であった。これらのコメントからは、座学で練習をこなすだけといったような授業スタイルである事が共通していた。その他、テストに関するコメント(2)や先生の話についてのコメント(2)などがあった。

### 3.5 英語表現Ⅱ

表5は英語表現Ⅱについての生徒の回答を示している。問55、56が英語表現Ⅱの目的に関する質問、問57～59が授業で指導する内容に関する質問、問60～65が言語活動に関する質問、問66～69が各科目に共通する質問である。英語表現Ⅱの目的に関する2つの質問では、どちらも肯定的に捉えている生徒の割合が最も多く(それぞれ42.9%、44.9%)、英語教員が積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、伝える力を育成しようとしていたと生徒は認識していた。

次の指導する内容に関する質問(問57～59)も同様で、肯定的な意見が最も多く(それぞれ46.9%、44.9%、44.9%)、理解したり伝えたりすることを実践する活動を取り入れており、具体的な言語の使用場面を設定し、英語を使って授業をする英語教員が多いことがわかった。

言語活動に関する質問(問60～65)では、[どちらとも言えない]の回答割合が最も多い傾向にあるものの、肯定的意見と否定的意見を比べると全てにおいて肯定的意見の割合が高かった。どちらかと言えば、学習指導要領で求められているような言語活動が多い実態が明らかとなった。特に問63、64では、肯定的な回答割合が最も多く(それぞれ47.9%、44.9%)、発表活動やそれに伴う質疑応答が言語活動として多く取り入れられていることがわかった。

各科目共通の3つの質問(問66～69)で特徴的だったのが問68で、コミュニケーション活動と関連づけて文法の指導をしているかどうかを問う質問で、初めて肯定的な意見が最も多くなった(42.9%)。これは、英語表現Ⅱ以外では見られない傾向である。コミュニケーション活動と関連づけた文法指導は学習指導要領(文部科学省、2009)の狙いとも合致したものとなっている。

英語表現Ⅱに関する自由記述回答は25であった。そのうちコミュニケーションに関する記述はカテゴリー間で重複する回答も含めて8あった。例えば、「ディベートの授業を2年の頃に行い、2年の後半にはあらかじめ提示されたテーマから選んでそれについて調べ、ポスターを作り、発表した記憶がある。そして、3年生では、自分が調べてみたいテーマを決め、卒論としてリサー

チ行い、その結果に関するパワーポイントを作り、クラスの前で発表した。」「発表も多かったが、文法をあまり気にせず、書くアクティビティも多かった。」などのコメントがあり、日頃の出来事についての発話ばかりでなく、論理性が問われたりするコミュニケーションや海外研修の準備と関連させた授業などもあった。

文法訳読や教科書に関する記述も8つ（それぞれ5と3）あり、「機械的に教科書通りに日本語訳をして終わりだった。」「文法事項について学ぶことが多かったが、それを実践する機会はほとんどなかった。知識の詰め込みといった感じ。」のようなコメントが多かった。量的な検討からは、文法がコミュニケーションと関連付けられて教えられていることを示唆している。一方で、文法偏重の授業も一部に残されている現状があると考えられる。

発音、音読についての記述もそれぞれ2つあり、「ALTの先生と一緒に授業したので、ネイティブの発音が聞いてよかった。」「音読やディクテーションなどいろんな勉強法を学んだ。」などの

表5 英語表現Ⅱに関する生徒の意識

英語表現Ⅱ	（そう思わない）		←→		（そう思う）	
	1	2	3	4	5	6
55 この授業で先生は… 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成していた。	2	6	8	12	6	15
	16.3%		40.8%		42.9%	
56 論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を育成していた。	2	3	8	14	14	8
	10.2%		44.9%		44.9%	
57 情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践する活動を取り入れていた。	3	3	7	13	13	10
	12.2%		40.8%		46.9%	
58 情報や考えなどを実際に理解したり伝えたりする具体的な言語の使用場面を設定していた。	1	7	9	10	17	5
	16.3%		38.8%		44.9%	
59 英語を使って授業を行っていた。	2	4	15	6	7	15
	12.2%		42.9%		44.9%	
60 与えられた条件に合わせて、即興で話す活動を授業で行っていた。	3	7	13	11	11	4
	20.4%		49.0%		30.6%	
61 伝えたい内容を整理して論理的に話す活動を授業で行っていた。	3	5	10	13	13	4
	16.7%		47.9%		35.4%	
62 主題を決め、様々な種類の文章を書く活動を授業で行っていた。	2	4	9	14	7	12
	12.5%		47.9%		39.6%	
63 聞いたり読んだりしたことなどにに基づき、情報をまとめ、発表する活動を授業で行っていた。	4	4	10	7	12	11
	16.7%		35.4%		47.9%	
64 発表されたものを聞いて、質問したり意見を述べたりする活動を授業で行っていた。	3	6	8	10	14	8
	18.4%		36.7%		44.9%	
65 立場を決めて意見をまとめ、相手を説得するために意見を述べ合う活動を授業で行っていた。	5	7	11	10	10	6
	24.5%		42.9%		32.7%	
66 イントネーション、話す速度、声の大きさなどに注意して聞いたり話したりする指導をした。	3	4	8	19	9	6
	14.3%		55.1%		30.6%	
67 文法など、英語についての分析や説明は必要最小限度にとどめていた。	4	8	16	8	7	6
	24.5%		49.0%		26.5%	
68 コミュニケーション活動と関連づけて文法の指導をしていた。	4	6	7	11	15	6
	20.4%		36.7%		42.9%	

注. N=50

コメントがあった。

その他の記述も7つあり、そのうち5つの記述が次のようなライティングに関するものであった。「100 words くらいの英作文を書いた。」「この授業は身につく内容が多かったと思う。授業後の質問の対応も良かったし、英作文の添削など、大変お世話になった。」などである。作文やその添削を行なっていることはわかったが、コミュニケーションが目的であることが明確でなく、その他のコメントに分類された。英語表現Ⅱとしてスピーキングばかりでなく、ライティングの指導にも力が入っていることがわかる。他には、単語テストや海外研修に関するコメントがあった。

#### 4. 考察

結果をもとに、研究課題の検討を行う。1つ目は、学習指導要領に書かれているコミュニケーションを目的とした英語指導に関する目標を、実際の授業ではどのくらい達成しているのかである。検討には、学習指導要領外国語の全体目標に関する質問への回答と、それぞれの科目の目標に関する質問への回答をもとに検討する。

外国語の全体目標に関する生徒の意識は、[どちらとも言えない]が最も多かったものの、[そう思う]と[そう思わない]の回答割合の比較では、どの質問事項に対しても肯定的に受け止めていた。それぞれの科目ごとに目標に関する生徒の回答を見ると、コミュニケーション英語Ⅰでは、肯定的回答と否定的回答の比較において、全ての項目で肯定的な回答の割合が上回った。この傾向はコミュニケーション英語Ⅱも同様で、問28、29の理解や伝える能力の育成については肯定的な回答が否定的回答を大きく上回った項目もあった。英語表現Ⅰでも同様の傾向が見られ、英語表現Ⅰでは、問42の積極的コミュニケーションを図ろうとする態度の育成の肯定的回答割合が否定的な回答やどちらとも言えない回答割合に比べて最も高かった(48.0%)。さらに英語表現Ⅱの目標に関する2つの質問では、肯定的な回答割合がどちらも最も高い結果となった(それぞれ42.9%、44.9%)。これら全体目標や各科目の目標は、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成や的確な理解力、適切な表現力など、コミュニケーションを目的とした英語指導に直結するものである。これらの結果から、学習指導要領に書かれているコミュニケーションを目的とした英語指導に関する目標を、実際の授業では一部達成しつつあると考えられる。このことは、前学習指導要領(文部科学省、1998)のもとでは、全体的な傾向として、学習指導要領の目標が教員によって効果的に実施されているとはいえないと結論づけたKikuchi & Browne(2009)の状況から、英語指導の方法が大きく変化していると考えられる。

2つ目の研究課題は、高校の英語の授業で教員の指導方法を生徒はどのように見ているかである。各科目の授業に取り上げなければならない内容、言語活動、各科目共通項目とした指導する上での留意点に関する生徒の回答結果をもとにこの課題を検討する。

まず、各科目の授業に取り上げるべき内容についてであるが、これはコミュニケーション型言語活動を行う際の条件となっている。取り上げるべき内容をまとめると(1)理解したり伝えたりすることを実践する活動、(2)言語使用場面の設定、(3)英語での授業である。このうち英語を使っている授業については全ての科目において肯定的な回答割合が最も高く(コミュニケーション英語Ⅰ、46.0%；コミュニケーション英語Ⅱ、48.0%；英語表現Ⅰ、40.8%；英語表現Ⅱ、44.9%)、英語による英語の指導が浸透してきていることがわかる。加えて、英語コミュニケーションⅠでは理解したり伝えたりすることを実践する活動、英語表現Ⅱでは3つ全ての項目において肯定的な回答が最も多かった。さらに、全ての科目において肯定的な回答が否定的な回答を上回った。

次に言語活動に関する回答から検討すると、コミュニケーション英語Ⅰにおいては、聞いて理

解する活動，読んで理解する活動，音読活動において肯定的回答の割合が最も高く，受動技能を中心としたコミュニケーション活動が授業において積極的に行なわれていた。また，英語表現Ⅱでは，発表活動やそれに伴う質疑応答の活動についての肯定的回答が最も多く，発表に伴うコミュニケーション活動が多く使われていることもわかった。この他の言語活動に関する回答も，例外なく肯定的な回答割合が否定的な回答割合を上回っており，言語活動がより積極的に授業で行われていると生徒は認識しているようである。

一方で，共通項目である指導上の留意点に関する質問では，文法の必要最小限度の説明についてコミュニケーション英語Ⅰと英語表現Ⅰで，否定的な回答割合が肯定的回答割合を上回った。また，他の科目でも割合については同じかほぼ同等であった。このことから文法の指導については現在もある程度の時間を割いて行われていると考えられる。

これらの結果から，学習指導要領に基づいたコミュニケーション重視の指導方法についておおむね生徒は肯定的に受け止めていると考えられる。これは，前学習指導要領（文部科学省，1998）の下で実施した Kikuchi & Browne (2009) の調査結果とは対照的な結果であり，この10年で教育現場の指導がよりコミュニケーションを目的としたものとなり，生徒の指導に対する見方も肯定的になっていることがわかった。しかし，文法など英語についての分析や説明には少なからぬ時間が割かれており，大学受験を意識した指導も引き続き行われていることも示唆されている。

## 5. 結論

本研究では，高校英語における学習指導要領の目標は達成されているかについて生徒の視点から検証を行った。その結果，学習指導要領(2009)に書かれているコミュニケーションを目的とした英語指導に関する目標を，実際の授業でもある程度達成されつつあることがわかった。学習指導要領(1998)について同様の調査を行った Kikuchi & Brown(2009)では，目標と実際の授業には少なからぬ隔たりがあると結論づけた。本研究の結論からは，この隔たりが小さくなりつつあることを示唆している。また，高校の英語の授業で教員の指導方法を生徒はどのように見ているかについても，コミュニケーションを重視した現在の各科目の指導方法について肯定的に捉えていることがわかった。これも Kikuchi & Brown の否定的な調査結果とは対照的な結果である。これは，教員および生徒の意識が受験のための英語から，コミュニケーションのための英語へと変化しつつあることを示していると思われる。一方で，文法の指導や説明にある程度の時間を割いていることや，文法訳読の授業が一部で行われていることもアンケート結果や自由記述の回答から明らかとなった。2022年より導入される高等学校学習指導要領(2018)では，交渉，討論，プレゼンテーションなど，より高いレベルでのコミュニケーション活動が求められるほか，4技能5領域の統合的なコミュニケーション能力の育成が必要となる。

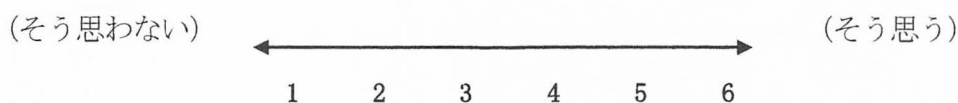
今後の研究が，標本数をより増やし，学習指導要領の目標と実際の教室における実践のギャップをさらに調査し，そのギャップを埋めていくことができるよう期待している。

## 引用文献

- 文部科学省 (1998). 『高等学校学習指導要領』 Retrieved from [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/cs/1320179.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320179.htm)
- 文部科学省 (2009). 『高等学校学習指導要領』 Retrieved from [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf)
- 文部科学省 (2018). 『高等学校学習指導要領』 Retrieved from [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661\\_6\\_1\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf)
- Baily, K.M., Berthgold, B. Braunstain, B., Jagodzinski, N., Fleischman, M.P. Holbrook, J.T., et al. (1996). The language learner's autobiography: Examining the "appreticeship of observation" . In D. Freeman and J.C. Richerds (Eds.), *Teacher Learning in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, J.D. and Yamashita, S. (1995). English language entrance exams at Japanese universities: What do we know about them?, *JALT Journal* 17 (1), 7-30.
- Gorsuch, G.J. (2000). EFL educational policies and educational cultures: Influences on teachers' approval of communicative activities. *TESOL Quarterly* 34 (4), 675-710.
- Kikuchi, K. (2006). Revisiting English entrance examinations at Japanese universities after a decade. *JALT Journal* 27 (1), 77-96.
- Kikuchi, K. & Browne, C. (2009). English educational policy for high schools in Japan: Ideal vs. reality. *Regional Language Centre Journal*, 40 (2), 172-191.
- White, M. (1987). *The Japanese Educational Challenge*. Tokyo: Tokyo International.

## 付録：高校の英語の授業についてのアンケート（抜粋）

高校で受けた授業についてのアンケートです。当時の授業を思い出しながら、正直に答えてください。なお、アンケートは研究目的のみに使用されます。また、アンケート結果は統計的に処理され、個人情報が漏れることはありません。アンケートは、下にある1（そう思わない）～6（そう思う）の6段階で回答してください。



### 高校での英語の授業全体について

私の受けた高校の英語の授業は…

- (9) 英語を通じて、言語や文化に対する理解を深めるのに役立った。
- (10) 英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するのに役立った。
- (11) 英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を高めるのに役立った。

コミュニケーション英語 I

この授業で先生は…

- (12) 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成していた。
- (13) 情報や考えなどを的確に理解する基礎的な能力を育成していた。
- (14) 情報や考えなどを適切に伝えたりする基礎的な能力を育成していた。
- (15) 情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践する活動を取り入れていた。
- (16) 情報や考えなどを実際に理解したり伝えたりする具体的な言語の使用場面を設定していた。
- (17) 英語を使って授業を行っていた。
- (18) 物事についての紹介や対話などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする活動を授業で行なった。
- (19) 説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする活動を授業で行った。
- (20) 聞き手に伝わるように音読する活動を授業で行った。
- (21) 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする活動を授業で行った。
- (22) 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く活動を授業で行った。
- (23) リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりする指導をした。
- (24) 文法など、英語についての分析や説明は必要最小限度にとどめていた。
- (25) コミュニケーション活動と関連づけて文法の指導をしていた。
- (26) 「コミュニケーション英語 I」の授業で印象に残っている事があれば、自由に記入してください。（こういう活動が多かったなど。）